小暮写眞館

1

――ところで、新しい店の住み心地はどうよ？

テンコからの携帯メールである。映画の無料券をもらったから今度の日曜にどうよ――という用件のケツに、付け足しの一文だ。

花菱英一は、足を止めて素早く返信を打った。ちょうど駅の改札にさしかかっているところだったので、師走の忙しい人たちの邪魔にならないよう、礼儀正しく脇に寄ることを忘れない。というか、寄らずにいられない。それには、ちょっとした理由があった。

この春、つまり英一が都立三雲高校の一年生になり、携帯電話所持解禁となったばかりのころのことである。家族で近所の中華料理屋へ食事に行く途中、歩道を歩きながらメールを打っていたら、横にいた父の花菱秀夫がいきなりケータイを奪い取ると、ひったくりのごとく走って逃げた。何が起こったのかわからずぽかんとしている英一を置き去りに、百メートルばかり走って姿を消し、三十分近く経ってからやっと現れてテーブルにつくと、はあはあ言いながら、

「花ちゃんのケータイ、隠しちゃったからな」

得意そうに宣言した。

「歩きメールは駄目だって言ったろ？　ルールを守らないからいけないんだ。猶予はきっちり二十四時間。自力で見つけられなかったら、没収だよ」

「あらタイヘン」と、母の花菱京子がちっとも大変そうではない口調で言った。「花ちゃん、ご飯食べたら探し始めないと」

ちょうどその時、店員が前菜の盛り合わせを運んできて、回転テーブルの真ん中にどんと置いた。英一は、両親と弟が嬉しそうに料理を取り分け始めるのを見つめつつ、これまでの十五年間に何度となく考えたことを、また考えていた。

オレはまだ、この両親に慣れられない。

二人とも、いわゆる奇人変人の類ではない、はずだ。父は二十数年もひとつの会社でサラリーマンを続けている。母は英一のときも、弟の光のときも、小学校でＰＴＡの役員をやった。光については今もやっているはずだ。どちらの学校でも、あの奥さんはどうにも変わった人だという風評がたったという事実はない。

だから二人とも常識人なのだろう。ただ時々、こういうことがある。内弁慶という言葉があるけれど、うちの親たちの場合は〝内変人〟というべきだろうか。

その時は結局、光の知恵を借りて、期限内にケータイを発見することができた。何のことはない、英一がそれを買った(買ってもらった)駅前の販売店に預けてあったのだ。駅前まで走って行って走って帰ってきたから、息が切れていたのである。

以来、英一は携帯電話を使う折には充分注意するようになった。言いつけに背いて歩きメールなんぞしようものなら、どこからともなく秀夫が現れて、またケータイを奪って逃げてゆくような気がしてしょうがないからだ。現実問題としては、そんなバカなことが起こるわけはない。それじゃあ秀夫

はスーパーマンだ。だが、どうしてもそういう気分になってしまうのだから仕方がない。強迫観念というやつである。それほどに、あの時、英一の手からケータイをひったくって走り去る父親の後ろ姿は真剣に見えた。

でも、他人に見せたいものではなかった。

そもそも、自分の長男を、友達がみんなそう呼んでいるからといって、一緒になって、

「花ちゃん」

と呼ぶのもおかしくはないか。英一が友人たちにそう呼ばれているのは、花菱という珍しい名字のせいである。しかし、花菱家のなかでは花菱という名字は珍しくもなんともない。デフォルトでついている。

この呼称が使われ始めたのは、二、三年前からのことだ。当時、オレが花ちゃんなら親父も花ちゃんじゃないの、と訊いたら、

「父さんは、友達には、昔からヒデちゃんて呼ばれてたんだ。今でもそうだよ」

「会社じゃどうなのよ」

「ビシさん」

職場の同じグループに、花田と花村という名字の人がいるからだそうである。

「いいじゃないか、外でも家でも花ちゃんで。統一がとれててさ」

ピカちゃんと一緒だ、という。確かに光は、〝ぴかぴか光る〟の洒落で、赤ん坊のころからみんなにピカちゃんと呼ばれているけれど、それとこれとは意味が違うように思う。

「まあ、いいけどさぁ」

好きにすれば、と言っていたら、母親まで英一を花ちゃんと呼び始めた。当然のようにピカもそれに倣う。八歳も年下の弟に、ちゃん付けされるのはイヤだ。おまえ生意気だぞ、と言ったら、

「だって、〝お兄ちゃん〟もちゃん付けだよ。同じじゃない？」

ちゃん付けがイヤだという攻め方が間違っていた。

矛先を変えて母親に直訴してみると、

「お父さんと話してて、思ったんだ。母さんね、あんたのこと、ずうっと〝お兄ちゃん〟て呼んできたでしょ。それって、良くないと思うの。まるで、あんたは〝お兄ちゃん〟という属性しか持ってないみたいだもんね。問題あるわよ」

いや、別にオレは全然そんなこと問題だと思ってないんですが。

「だけどオレは、母さんのこと母さんて呼ぶし」

「それはいいのよ。あんたにとって母さんは、丸ごと母さんだもの。けど母さんだって、職場じゃ〝キョーコちゃん〟なのよ」

花菱京子は、パートタイムではあるが、都心にオフィスを構えているけっこう大きな会計事務所で働いている。女性は京子一人で、ほかはおっさんばかりだそうなので、〝キョーコちゃん〟が有効なのだ。

「〝英一〟って呼ぶんじゃ駄目なの？」

「あんた照れない？」

母さんは照れちゃうわぁ、と言った。「だってガールフレンドみたいじゃない」

まだガールフレンドがいないのでわからないが、パンツ洗ってもらっている母親に照れられるのは居心地が悪い。再び、まあいいけど、ということになった。

さて、前置きが長くなったが、テンコのメールである。

もちろん、テンコも呼称だ。彼の名前は店子力という。英一とは小学校一年で同じクラスになって以来の付き合いだ。学区域に縛られる中学校まではともかく、高校まで一緒になったのは驚いた。都

立三雲高校は、英一にとってはかなり背伸びした第一志望校だったが、テンコにとっては二次志望クラスのランクの進路だからである。
店子力。この字面を見るたびに、英一はいつも、
（惜しい）
と思う。「店」が「原」なら原子力だ。
店子は花菱以上に珍しい名字だが、あだ名の付きやすい名字でもある。テンコは物心ついたころからテンコと呼ばれている。
英一は短い返信をした。
――店じゃねぇ。家だ。
改札を通って地下鉄のホームまで降りてゆくあいだに、またメールの着信音がした。
――映画おごるから、土曜日、あのスタジオに泊めてくンない？
英一は小さな液晶画面を睨んだ。電車がホームに入ってきたので、ケータイを畳んで制服のポケットにしまう。
スタジオじゃねぇっての。あれはリビングなの。
ため息が出てきそうになったので、意識して呑み込んだ。この一件では、数え切れないほどため息をついたし、鼻息を荒らげたし、声を振り絞ってもきた。それらはすべて徒労に終わった。
それでも、今度ばかりは軽々に、「まあ、いいけど」と言いたくない。そう簡単に、慣れられない。
新しい家。そう、花菱秀夫・京子夫妻は、この夏、結婚二十周年を機に念願のマイホームを購入したのである。転居は先週の土曜日につつがなく終了した。英一の通う三雲高校には、これまでの家よりも、新居の方がずっと近い。公立一本槍の英一とは違い、たいそうな試験を受けてパスして、私立朋友学園小学部に通っているピカは、転校の心配がないばかりか、これまた今までより電車通学の乗り換えの便がよくなった。
ローンの方は任せとけと、秀夫は言った。任せるも何もあんたの家だと、英一は腹の底で思っていた。オレは絶対、相続しないから。あんたがどんな家を買おうと自由だが、オレには残さないでくれ。
普通の家ではないのだから。
新居というのも、花菱家にとって新しい家だというだけで、家そのものは新しくない。築三十三年である。
世の中には、古家を買って改装して住む人びとがいる。わざわざ遠方の山のなかから、古式ゆかしい藁葺き屋根の日本家屋を運んできて、我が家とする人たちもいる。英一も、それはわかる。自分の家なんだから、自分の趣味が反映されたっていい。それが持ち家の醍醐味なんだろう。
だが、しかし。
現在建っている古家を壊してしまうと、建築基準法だの消防法だの計画道路だのあれやこれやのやっこしい決まり事に遮られ、同じ容積の家は絶対に建てられませんよ――と、不動産屋が太鼓判を押しているような宅地を、どうして買うのか。
そこに建っている家屋は、既にして資産価値が消失しているので、不動産情報シート上には間取り図が載せられていなかった。脇の囲みの詳細情報のなかに、
「古家あり」と記されていただけだった。つまり売りものは土地だけだったのだ。
そういう家を、なんで買うのだ。
「補強して修理すれば、いい家になるよ。まだまだ住めるよ」
ままよ、百歩譲ってそれはよしとしよう。だが、それでもしかし。
「土台とか柱とか水回りとかの補修にお金がかかるからね、内装のリフォームは、最低限に抑えなくちゃならないんだ」

安心して住める我が家にするためだと、秀夫は言った。
「だから、母さんとも相談したんだけどさ、この家のお店の部分、そのまんま残して使おうよ。ユニークで楽しいしさ」
花菱夫妻が買った初めての、そして生涯唯一になるであろうマイホームは、店舗付き住宅なのである。
「そりゃ名案だ。面白い家になりますよ。よかったね、坊ちゃん。お友達に自慢できるよ」
契約の日、仲介の不動産屋は、両親に挟まれてニコニコと座っているピカに笑いかけて、そう言った。英一は、狭い事務所の片隅でパイプ椅子に尻を載せ、旧式のエアコンが吐き出す冷気に、しょぼい造花の胡蝶蘭がだるそうに揺れるのを眺めていた。
その傍らでは、両親が決定的な書類に決定的なハンコを押して、決定的な署名をしていた。売り主は地味な五十年配の夫婦で、やっぱりニコニコ笑ってはいたけれど、それは驚きを隠すためだったろうと思う。そりゃそうだろう。誰が「古家あり」の「古家」を買うものか。
「私らは、あの土地、コインパーキングにでもしてもらうのがいちばんいいと思っていたんですが」と、売り主の夫の方が言った。本当は、コインパーキングぐらいしか使い道がない、と言いたかったのだろうと思う。
「あの家を残してもらえるならば、亡くなった父も喜ぶと思います」
それは請け合いかねますけども、確かにうちの父は喜んでいます。心のなかで呟いて、英一は、今度もまた父親が彼の手元から、彼なりのマイホームとマイルームへの淡い夢をひったくり、脱兎の如く走り去ってゆくのを感じていた。
あのうだるように暑かった八月の日から、修理と補強の三ヵ月を経て、今日は十二月の三日。新居の最寄り駅で改札を通る英一の手には、新しいルートの定期券が握られている。

階段を上がって地上に出て、徒歩で五分。この点では、不動産情報シートに嘘はない。駅至近。大型スーパーまで徒歩八分。そのとおりだ。が、嘘はなくても書かれていない事実はある。
花菱家の新居である店舗付き住宅は、そんな近いところに大型スーパーができたが故に臨死状態になってしまった商店街のど真ん中に位置しているのである。
平日の昼間、緩やかに左右にうねっている一車線の道を、英一は一人で歩いてゆく。共に吹き抜けるのは北風だけだ。商店街というより、店舗用各種シャッターの設置経年劣化を示す屋外展示場のようだ。世間は忙しないはずなのに、この静けさ。
引っ越しの手伝いに来てくれた時、テンコは、コンビニに飲み物を買いに行って戻ってくるなり、こう言ったものだ。
「『真昼の決闘』だね。だぁれもいないよ」
これから無法者とロートル保安官の対決が始まるからではない。この商店街では、無法者も含めてほぼ全員がロートルなので、みんなあんまり外に出ないのだ。出るのは医者通いの時だけである。
新しい我が家が見えてくると、押さえきれなくなったため息が出た。
補修はしても、古家であることは一目瞭然である。木造二階建て、モルタル外壁、一部タイル張り。この「一部」というのは、補修の結果ではない。もともとこうなっていたのだ。二階建ての家がビルみたいに見えるように、家の正面の部分に、四角い飾り外壁が付けられていて、瓦屋根を隠している。この外壁に、タイルが張ってあるのだった。
父はこのタイルにも、飾り外壁にも固執した。これがいいんだ、と喜んだ。タイルだけ新しいのに張り替えなきゃならないけどね。
秀夫が固執したものは、まだある。この家の歴史だから、このまんまにしておこうよ、と。
出入口の向かって左側に、二畳分くらいの大きさのウインドウがある。正面のガラスははめ殺しで、

ウインドウ内に飾るものは内側から出し入れするようになっている。
そしてそのウインドウの脇、片開きの入口のドアとのちょうど真ん中に、重々しい存在感をまとって、もうひとつのものがある。
タイル張りの壁面に打ち付けられていたので、張り替えの時は、工務店の作業員がいったん外した。それを秀夫が、わざわざまた元の位置に付け直してもらったのだ。何でだよ、と思った。外したんなら外したまんまにしときゃいいじゃないか。
「外したら、これ、ただのゴミになっちゃうんだよ。もったいないだろ」
もったいないって、こういう時に使うべき言葉だろうか？
問題の「これ」とは。
縦が二十センチ、横が八十センチ弱。厚みは一・五センチ程度の合金製。銅が混じっているのか、ところどころに緑青が浮いている。風雨にさらされ、年月に削られてはいるが、そこに浮き出している文字は、今もはっきりと読み取れる。
この家――この店の昔の商いを示す看板だ。
〈小暮写眞館〉
真が眞であるところも、念がいっているではないか。

2

土曜日の午後五時過ぎ、テンコはいつものように寝袋を担いで泊まりにやってきた。それはいいのだが、何か別のものも提げている。新聞紙で大ざっぱに包んで、持ちやすいように紐をかけてある。
「それ、もしかして？」

「うん。引っ越し祝い」
要らない、と英一は言った。新聞紙を開いてみなくても、その形状から、中身が何だか察しがついたからである。
「そんな冷たいこと言わないでよ。うちの父ちゃんも喜んでるんだ」
テンコが新聞紙の包みを開くと、案の定、出てきたのは例のリトグラフである。
もう二十年近く前になるだろうか。このリトグラフが大流行した時期があった。もちろん英一はリアルタイムでは知らない。全部テンコの父ちゃんから聞いた話だ。
作者はサーファーだかヨットマンだか、とにかく海を愛する男なのだという。で、クジラとかイルカとかを素材に、たくさんのリトグラフを創った。その手のものどもが棲息しているのは海のなかと相場が決まっているから、必然的に、彼の作品の色調はみんな同じである。青い。ときどき波が白いけど、とりあえず青が絶対優勢だ。百メートル先から見たって、あああのリトグラフだなとわかる。
今見ると、なんでこんなもんが流行ったのか理解に苦しむ、安っぽいポスターみたいな絵である。なのに、当時はけっこうな値段で売り買いされていたし、欲しくても手に入らない人もいたそうである。
テンコの父ちゃんは、このリトグラフに魅了されて入れあげた。二十点ほどお買い上げになり、その後、人にあげたり売ったりして手放したものもあるが、今も手元に十点残してある。家のあちこちに飾り、診察室と待合室にも飾ったが、どれも大きなサイズの作品だから、飾りきれずにしまってあるものもある。それを持ち出してきて、花菱家の引っ越し祝いにしようというのだ。
テンコの父ちゃんは歯科医である。大学病院に勤める一方、週に三日は目黒の自宅で開業している。腕がいいと評判で、患者は多い。だから金持ちだし、普段はとても気前のいい人だ。テンコと英一は、しょっちゅうお互いの家に出入りしているし、泊めたり泊めてもらったりすることも多いから、それ

は英一もよく知っている。店子家のバーベキューは超豪華で、泊まりにいくたびにご馳走になる英一があんまり吹聴するものだから、ピカも一緒に行きたがっては両親にとめられている。

だからテンコの父ちゃんは、ケチっているわけではない。本当にお祝いの気持ちでいっぱいで、自分がいちばん気に入っている、いわば秘蔵の品物をテンコに持たせて寄越したのだということも、よくわかる。

こういうのをありがた迷惑という。

テンコが指さす。「これさぁ、このウインドウにちょうど」

「よくねぇ！」

二人は、花菱家の（というか小暮写眞館）店舗部分にいた。受付の部屋は四畳半ぐらいで、全体に土間になっている。内装をいじった時、カメラやフィルムやお客に渡すプリントなんかを置いていたであろう棚はみんな撤去してしまったが、カウンターはそのまま残してあり、家のなかには、カウンターの後ろで靴を脱いであがれるようになっていた。横手にはドアがあり、リフォーム前はそこからスタジオに通じていたが、さすがにそれではすきま風が寒いというので、今はパーティションで仕切ってある。

だから、テンコが「このウインドウ」と言って指したのは、小暮写眞館正面のあのウインドウのことだ。

頼むからしまってくれと、英一は大急ぎで額縁を新聞紙で包み直した。幸い、両親は買い出しに出かけている。ピカもくっついて行ったから、今は二人だけである。

「でも俺、父ちゃんに言いつかってきたんだよ」

テンコは色白で華奢で、顔立ちが女の子っぽい。その点ではピカとよく似ていて、三人で歩いていると、よくテンコとピカが兄弟と間違われるほどだ。ただ、声だけはその顔を裏切っていて、何というか、一種独特の壊れたような響きがある。野太いのではないし、かすれているのでもない。微妙にズレているというか、どこか故障している感じなのだ。

小学校六年生のとき、音楽の先生が、声変わりしたてのテンコが課題の「浜辺の歌」を歌い終えたその時、

——店子君は、地声が音痴だね。

と言ったことがある。英一がこれまでの人生で耳にした、ベスト・オブ・的確な表現のひとつである。

そういう声を出して、テンコは困っている。色白の顔によく映るパステルカラーの混色編みのセーターに、ポケットがたくさんくっついた迷彩柄のズボン。今日もにぎやかな出で立ちだ。テンコは色彩感覚についても壊れたところがある。

「もらっとくから、親父さんにはよろしく言っといて。気持ちはホント嬉しいって」

「でもさぁ」

この古家にも取り柄がまったくないわけではない。これまで住んでいた賃貸マンションより、部屋数が三つも多いのだ。さらに収納スペースもたくさんある。押し入れ、物入れ、両開きの扉つき戸棚に、三畳分ほどの広さの納戸まであった。

引っ越しの際、当面使う予定がなさそうな雑多な荷物は、みんなその納戸にしまった。だからテンコの引っ越し祝いも、そのなかに紛れ込ませてしまえば、父も母も気づくまい。

気づかれるとまずいのだ。必ず、

「飾ろうよ。ちょうどいいよ、あのウインドウに」

そう言うに決まっているからだ。

「花ちゃん、ちょっと考えてみ」

テンコはつるつるした鼻の頭を指先で撫でながら、自分の方が考え込んだような顔をしている。
「あのウインドウ、ずっと空っぽにしておくと、どうなると思う？」
「どうにもならねぇよ」
「いンや。おじさん、家族写真を飾るよ。俺、賭けてもいいけど」
返事ができなかった。図星のような気がしたからである。
テンコは英一の顔色を読んで、にやにや笑った。「な？」
秀夫は英一を花ちゃんと呼び始めるのを機に、テンコのことも「力君」からテンコ君と呼び替えた。途端に、二人のあいだに何かしら妙に通い合うものが生まれたようで、秀夫の意向とか趣味とか考え方を、テンコは時々、怖いくらい正確に読み取る。
そういえば今朝方、父さん、アルバムはどこだとか言ってなかったっけ？
家族写真を選んで、引き伸ばして額に入れて飾る――つもりでいるのかもしれない。
「このクジラとイルカ、けっこうスペースをふさぐからさ。こいつ飾っとけば、しばらくは時間稼げるんじゃね？」
花菱秀夫はあれで非常に義理堅い人で、他人様からいただいたものは、けっして粗末にしない。テンコの家からの引っ越し祝いだから目立つところに飾ったよ――と言えば、少なくとも当面は、あのウインドウにほかのものを入れようとはしないだろう。
無言のまま、英一は額縁を取り出した。
「釘とかトンカチとか要る？」
「要らない。中にフックがあるんだ」
ウインドウは外から見ると壁面とほぼ一体化しているが、内側から見ると三十センチぐらい箱形に出っ張っている。箱形の横っ腹に蝶番と取っ手があって、取っ手の方を引っ張ると、出っ張った部分

全体が手前に開くようになっているのだ。
昔は、お客を撮影した写真を額装して、このウインドウのなかに飾ったのだろう。写真館ならどこでもしていることだ――と思ったが、あれって写真を飾るとき、お客の許可は要るのかな、要るんだろうな、肖像だもんなと、ちょっとだけ考えた。
「うわぁ……これ、ちょっと怖くね？　あんまし重たいもの掛けられないよ」
箱形の部分を開いてみて、テンコが声をあげた。外枠と箱形の部分を、五センチぐらいの大きさの蝶番が三つ繋がれて支えている。確かに頼りない感じで、初めてここを開け閉てしたとき、英一もそう思った。が、リフォームに来た工務店の社長は、しっかり造られているものだから大丈夫だと言っていた。
――テストで満点とったら、ここに貼ったらいいんじゃない？
その時も英一は真面目に頼んだ。冗談だと思いますけど、うちの親の前でそういうこと言わないでください。実行しちゃうから。
「ガラス、曇ってるよ。拭いた方がいいね」
花ちゃん、バケツと雑巾と要求するので、取ってきた。テンコは箱形の内側に入り込んで、まめまめしくガラスを拭き始める。
「こんちはぁ」
なんて言うから何かと思えば、表の商店街を人が通りかかったのだ。
「下手に挨拶なんかするなよ。まだ商売やってると思われるだろ」
「だって目が合っちゃったから」
「年寄りだろ？」
「ううん、女の子だったよ」

俺らと同じくらいじゃない？　という。珍しい。そんな若者がこの通りにいたのか。
「ぼさっとしてないで、花ちゃんもガラスの外側を拭いてよ」
寒いので、雑巾だけぶら下げていって、ちゃっちゃと拭いて済ませた。テンコは、あとでから拭きしないと、なんて言っている。
青い海とクジラとイルカのリトグラフは、ウインドウに置くと、サイズはでっかいのに、妙に心細そうに見えた。思いっきり季節外れだし、時代遅れだし、こいつはこいつなりに己というものを承知していて、スミマセンねという感じにも見えた。
零落——とはこういうことを言う。
「ほかに何かないかな」と、テンコは言う。「造花とかさぁ」
首をひねって、あ、と目が明るくなった。
「夏休みにピカちゃんが作った紙粘土の人形、あったよね。あれ、飾ろう」
「どこにあるか知らない」
「きっとピカちゃんの部屋だよ」
英一とピカの部屋は、二階のふた間続きの和室である。英一の方は六畳で、ピカの方は三畳にちょっと板張りの部分がついている。押し入れは英一の側に、ピカの側にはロッカーぐらいのサイズの細長い開きがある。
ピカが夏休みの自由制作で作った紙粘土の人形は、彼の学習机の上の棚に、仲良く並べてあった。赤いのと黄色いのと一対になっていて、形だけなら象だ。たぶん象だろう。ただ、牙の替わりに角があり、尻尾の先に花が咲いている。
「勝手に飾ったら、あいつ怒るかも」
「怒ンないよ。ピカちゃん、これ自慢にしてるんだから」

外見だけではなく、テンコとピカは嗜好も似ていて、気が合うから仲がいい。テンコがそう言うなら心配ないだろう。
「この尻尾のとこ、ピカちゃん、作るのに苦労してたんだ。折れやすいからそうっと持ってよ」
こんなことも、英一は知らないのにテンコは知っている。たまに、オレはこの両親には永遠に慣れられないし、弟には絶対勝てない——と思って気が鬱ぐとき、英一は、オレがテンコの家の息子になって、テンコがオレん家の息子になったらどうかな、と思うことがある。
そして数十秒で考え直す。テンコは一人息子なので、父ちゃんの跡継ぎだ。歯科医にならねばならぬ。それには歯学部に進まねばならぬ。テンコなら充分可能だ。昔っから秀才なのである。でも英一には不可能だ。学年の下から数えて五十位ぐらいのところの前後一、二位を争うので精一杯の学力なのだから。
そういえば、小さいころから優等生だということも、テンコとピカは似ている。
高校もテンコと一緒だということがはっきりしたとき、誰よりも喜んだのはピカだった。学校が違ったら、今までみたいにテンコちゃんに会えなくなっちゃうと思ってたもん、と。
まさかテンコのヤツ、ピカのそういう心情をおもんぱかって三雲高校を選んだんじゃねぇだろうなと、英一はふと勘ぐったものだ。が、本人に訊いたら、学校見学で気に入ったからだよと、あっさりしたものだった。
それでも、心のどこかにちょこっと引っかかってはいた。もっともそれも、ほどなくして両親がこの古家に巡り合うまでの話だ。巡り合ってからこっちは、ほかのことにかまけている余裕などなくなってしまった。
二人で外に出て、ウインドウを眺めてみる。真っ青な空と海とクジラとイルカと、角のある花咲ゾウの人形のワンセット。

「なかなか楽しいんじゃね？」
テンコは両手を腰にあてて満足そうだ。
「この家の住人はいい人たちだって、ひと目でわかるよ」
「変わり者だってことがわかるんだよ」
まあ、いいけどさ――と英一が呟くと、テンコは笑った。
「出た出た、花ちゃんの決め台詞」
そんな上等なものじゃない。この家族に――今ではこの家族プラスこの家に慣れるための、英一なりの健気な処世術である。
あ、テンコちゃんだと、ピカの声が聞こえてきた。ひとつ先の交差点の向こうにいる。すぐ後ろを、両親がスーパーの大袋を提げて歩いてくる。おう、こんにちはと父・秀夫が手を上げた。母・京子も笑顔になる。
母の手には、スーパーの袋のほかに、小ぎれいな花束がある。それを見て、テンコが急に小声になった。「あ〜、失敗した。俺も思いついてたんだけど、ウチを出たら忘れちゃった」
「何だよ」
「風ちゃんに、花、買ってこようと思ってたんだ。母ちゃんとも話してたのに」
花菱家の三人は赤信号で止まっている。ピカは早く渡りたくて、ぴょんぴょん足踏みしている。
「それこそ気持ちだけでいいよ」と、英一も声を小さくして言った。「テンコが風子によくしてやると、ピカが一人前にヤキモチ焼くからさ」
「そっか」と、テンコは赤信号の向こうのピカに笑いかけた。「ピカちゃん、やっぱまだよくわかんないンだろうからね」
信号が青になった。ピカが駆けてくる。

わかんないンじゃないんだ。いろいろとわかってきてるんだ。だからヤキモチを焼くんだ。その言葉を、英一は口には出さなかった。そこまでピカのことを理解してやらなきゃならない義理は、テンコにはない。
花菱家は、本当は五人家族であるはずだった。英一と光のあいだに、風子という女の子がいたのだ。六年前の三月に四歳で亡くなった。インフルエンザ脳症が原因だった。
当時、英一は十歳だ。風子の記憶があるし、風子が死んだときの両親の苦しみと悲しみも、知っているし覚えている。でもピカはたった二歳――正確に言うなら二歳と四ヵ月だった。
人間の脳のシステムが完成するのは三歳前後なので、それ以前の早期記憶は残らないものだと、脳科学の本で読んだことがある。赤ん坊のころの記憶があると言い張る人は、たいていの場合、あとから聞いた話を自分の記憶のように思い込んでいるだけなのだそうだ。
だからピカは、風子のことを何も知らない。知らないけど、わかってはいる。今も両親が、片時も風子のことを忘れずに、折々に、まるでずっと一緒に暮らしているみたいにふるまうからだ。
それはけっして悪いことじゃないし、そうせずにいられなくて当然だとも思う。でも時々、オレはいいけどピカは可哀相だな、と思うことはある。
そう、だから今度のこの古家購入騒ぎの時に、もしも父と母のどっちかが、
――この家は、風子だって気に入るよ。きっと面白がって、喜ぶよ。
なんて言い出したら、ちょっと座り直して説教の逆襲をしようと考えていた。
その必要はなかった。両親は風子のことを一度も持ち出さなかった。英一はほっとしたけれど、一方で〝新しいおうち〟というものに、自分以上に子供っぽい憧れや夢を抱いているはずのチビの弟が、両親のどちらにもひと言も文句を述べず、にこにこと賛成しているのを見て、半分痛くて、半分腹立たしかった。

「見ろ見ろ、ピカちゃん。飾っちゃったぞ」
テンコがウインドウを前に胸を張る。ピカは歓声をあげて飛び上がった。
「わ、スゴイねテンコちゃん！　ありがとう！」
「あれぇ」と、秀夫がスーパーの袋を持ち直しながら声をあげた。「何だ、写真の額装、頼んできちゃったよ」
本気で家族写真を飾るつもりでいたのだ。英一は冷汗が出た。
「すんません。これ、うちからの引っ越し祝い」
テンコが首をすくめつつ、ホラ見れ正解だったろ？　と目配せしてくる。
「いいじゃない。やっぱり写真を飾るのは恥ずかしいもの。こっちの方がずっと素敵。ありがとね、テンコちゃん」
お夕飯はすき焼きだよと言って、京子が店の入口を――いや玄関を、開けた。

秀夫と英一とテンコの三人で、牛一頭の七割ぐらいは確実に平らげた。それから、コーヒーを飲もうというので、みんなでリビングに移った。
リビングである。昔は写真撮影用のスタジオだったかもしれないが、だから窓がないし天井が高くて暖房が効きづらいけれど、今は花菱家のリビングだ。
それなのに、さっそくピカが張り切って、
「テンコちゃん、どれがいい？」
左手の壁のところに飛んでいく。繰り返すがこの家は、以前の住まいよりうんと広い。花菱家手持ちの家具や家電を収めても、空きスペースが出た。それを充分に計算に入れた上での措置ではあるが――なにしろ両親は、引っ越し前に紙の模型をつくって家具の配置を考えたのだ――このリビングには、家具も備品も何も置いてない、まっさらの壁が一面だけあった。
かつてこのスタジオで写真を撮るとき、被写体はこの壁を背にしてポーズを決めた。
だから壁の上部に、ロール・スクリーン式の背景幕が取り付けられている。八パターンあって、任意に巻き上げたり下げたりして替えることができる。これもまた秀夫が固執した、小暮写眞館の遺物である。理由は例の如くだ。面白いじゃないか。取っ払っちゃったらゴミになっちゃうんだよ、もったいないよ。
ピカはスクリーンを引っ張る紐をつかんでいる。腹いっぱいのテンコは寝そべったまま、
「富士山！」と注文した。
「ハ～イ、富士山ですよ！」
するすると富士山の背景幕が下りてくる。残す以上は汚くしておくのはイヤだったから、頑張って埃をはらったけれど、古色が浮いて色褪せているのは如何ともし難い。
「いいねぇ、簡単に壁紙が替えられる」
寝っ転がりながら、秀夫も言った。寝そべると、ちょうど彼の頭の先に、風子の位牌を収めた小さな仏壇が位置する。塗りではなく白木で、扉の前面には花の彫刻がいっぱいだ。女の子らしいからと、京子が選んだ。
英一が座っている場所からは、仏壇のなかの風子の遺影が真っ直ぐ見えた。お気に入りだった黄色いワンピースを着て、眩しそうに目を細めて笑っている。亡くなる直前に、家族で上野動物園に行った時に撮ったものだった。忘れはしない。英一がシャッターを押したのだから。
「ピカちゃん、何で絵柄がわかるの？」
「この紐のとこに、ひとつひとつ札がついてるもん」
「これ、どんな撮影の時に使ったんだろうね。銭湯の壁みたいな絵じゃない」

コーヒーカップを並べながら、京子が言った。
「還暦祝いとかじゃないか」
「桜の絵のもあったよね？」
それはこっち、と、ピカが別の紐を引っ張る。桜ではなく、白地に金の雲の幕が下りてきた。
「あ、間違えちゃった」
「こいつは金婚式用かねぇ」
俺にもやらせてと、テンコも起き上がる。
「七五三用の、あったろ。引っ越しの時に見たよ」
「どんな絵だっけ」
「神社の鳥居が描いてあンの。鳩が飛んでて」
ああでもないこうでもないと騒ぎ、やたらと巻いたり下げたりして、ピカは大はしゃぎだ。テンコが来ると、いつもこうである。
「しっかしこの字、達筆だなぁ」
テンコが紐についている札に触れて、秀夫の方を振り返った。
「おじさん、これ見ました？　すげぇ味のある、いい字ですよ」
どれどれ、と秀夫が寝そべったまま首を伸ばす。テンコは紐を引きずって、札の方を秀夫の目の届くところまで持って行った。
「ほらね？　前に住んでた人、習字とかやってたんじゃないかなぁ」
お年寄りだったからねと、秀夫は言った。「亡くなったとき、八十五歳だって」
「でもこの字はしっかりしてますよ」
「もっと若い時に書いたんじゃねぇの？」と、英一は口をはさんだ。「だってその札、黄ばんじゃってるし。うんと昔に書いたんだよ。古いんだよ」
何もかも古いんだよ、この家は。
「背景の幕だってさ、今はこういうロール式じゃなくて、扉みたいに引っ張って出し入れするヤツになってない？」
ピカの入学の時、記念写真を撮ってもらった写真館はそうだった。
「あの写真屋さん、上手だったね」と、京子が言った。「次にみんなで撮るのは、花ちゃんの大学入学の時かな」
「いいよそんなの。まだゼンゼン先のことなんだから。どうなるかわかんないし」
この四月の高校入学の時も、両親が記念写真を撮ろうというのを、何とか逃げ回って回避した英一だった。
写真は好きじゃない。自分が写った写真を、しげしげ見たことなんか一度もない。
満腹の秀夫は欠伸まじりに、「そんな面倒くさがらないでさ、撮ろうよ。これからはさ、いちいち写真屋さんに行かなくても、どんな記念写真でもここで撮れるんだから」
「あ、実はうち、ずっとそうです」と、テンコが言う。「何かっていうと、写真館の親父さんが助手連れて来ンの。先月も来た」
「何の記念写真？」
「祖父ちゃんが勲章もらったもんで」
店子家は金持ちかつ名家なのである。
ええ？　何？　おめでとう！　そういうことは早く言ってくれないと。お祝いを贈らなきゃ、などと騒いでいるところへ、インタフォンが鳴った。
店舗付き住宅はたいていそうだが、この家も、店の出入口のほかに、住まいの方にも出入口がある。

裏手の路地に面したドアで、つい「勝手口」と呼んでしまうのだが、花菱家にとってはこちらこそが正式な玄関なのだから、インタフォンもそこに設置した。路地の側は街灯が少なく、夜になると暗いので、センサーライトとモニター画面のついたインタフォンだ。ついでに言うと、リフォーム以前は、饅頭にへそをつけたみたいな旧式のブザーだったのだ。秀夫はこれも残したがったのだけれど、さすがに京子の反対にあった。うちにはピカちゃんがいるんだし、セキュリティはちゃんとしないと。

設置したのだから、誰か来れば鳴るのが当然のインタフォンである。が、一同は何となく顔を見合わせた。引っ越して一週間。両隣の家には挨拶に行ったけれど、知り合いなんてまだいない。こんな時刻に、誰が来るというのだろう。

「新聞屋さんかな？」

京子が立って、台所のモニターを見に行く。ピカもくっついて行く。すぐに、

「誰もいないよ」と言った。「何にも映ってないもん」

「ライト、点いてるか」

「うん、点いてる」ピカは背伸びしてモニターを覗き込む。

「イタズラだね」

京子は目を離して、ついでに台所の食器を片付け始めた。ピカのほっぺたに反射していたモニターの明かりが消えた。

と思ったら、またインタフォンが鳴った。

ピカはすぐに、手を上に伸ばして通話ボタンを押した。このインタフォンは新式で、ボタン操作だけで何でもできる。

マイクに向かって「はい、どなたですかぁ？」と、ピカが叫ぶ。

みんなで耳を澄ましても、スピーカーから漏れてくるのは耳障りな雑音だけだ。返事はない。

背伸びするついでに鼻の下まで伸ばして、ピカは食いつくようにモニターを見ている。

「何にも映ってないよ」

イタズラよと、また京子が言った。

「オレ、見てくるわ」英一は立ち上がった。テンコもついてくる。廊下に出ると、

「店の方、見てみる」と、二手に分かれた。

廊下の電気を点けようかとスイッチに触り、とっさにやめた。イタズラ者の仕業なら、こっちが近づいてゆくのを気取られない方がいい。

勝手口――ではなく玄関の靴脱ぎに降りて、ドア・アイに目をくっつけてみる。センサーライトはまだ点いていて明るいが、誰もいない。狭い路地を挟んだ向かいの家の前に、自転車が一台あるだけだ。

英一は鍵を開け、チェーンも外して、ばん！　とドアを開けた。ノブを握ったまま、身体を半分、戸外に出す。

とたんに、ぶるっと震えた。今夜はかなり冷え込んでいる。

左右を見回してみる。路地には誰もいない。アスファルトがセンサーライトの光を青白く照り返している。ほんの数年前までは、この路地は舗装されていなかったと、不動産屋は言っていた。だからきれいな道ですよ。舗装したてだから。

こんな時刻に、他所の家のインタフォンでピンポン・ダッシュ遊びをする子供なんかいるだろうか。いるのかな？　今日日の小学生は、塾通いだお稽古事だで、残業帰りのサラリーマン顔負けに、夜遅くなっても平気で道を歩いている。ピカの友達なんか、みんなそうだ。

昼間、テンコは商店街を歩いていく女子高生を見たというし、まだオレたちが遭遇しないだけで、この道筋の若年人口もゼロではないのだろう。目新しいセンサーライトが気になって、ガキんちょが

イタズラしてったんだな――
と、ドアを閉めて鍵をかけた時、店の方でテンコがわっと叫んだ。
英一よりも早く、両親とピカが駆けつけた。テンコは例のウインドウの箱形の部分とガラスのあいだに挟まったまま、変なふうに中腰になっていた。目はガラスの外に釘付けだ。
「何だよ？」
集まった一同に、もういっぺん「わぁ」と言ってから、テンコはガラスの向こうを指さした。
「何か、通った」
そりゃ通るだろう、死に体とはいえ、一応は商店街だ。
「ふわっと通った」
浮いてた、という。
「それよりおまえ、何でそんなとこ開けてんの？」
「外を見るのに、これがいちばん早いもん」
以前は、店の出入口の扉は半透明の樹脂製で、外からカウンターのあたりまでうっすらと見通せるようになっていた。さすがにそれでは落ち着かないので、リフォームの際、一般住宅用の玄関ドアに取り替えた。ここには窓もないので、確かに外を見通すにはウインドウを開けるのが手っ取り早い。
スリッパ履きのままで、秀夫が土間に降りてテンコと並んだ。ガラスに手をついて、ついでに顔までおっつける。
「ふわっと、何が通った？」
「女の子です」
「昼間もそんなこと言ってたじゃんか」
「あれは生きてた。ちゃんと歩いてた。生足（なまあし）だった」

でも今のは違う、という。
「女の子って、どんな女の子？」
土間への降り口に立って、柱に手をつき、京子が尋ねた。ピカは京子の腰にしがみついている。テンコはちょっとそれを見て、
「ごめんねピカちゃん。おどかすつもりじゃないんだよ」
ピカは固まっている。
「ね、どんな女の子？」京子が重ねて訊いた。「いくつぐらい？」
「あ、俺らぐらいです」
やっぱり昼間と同じじゃないか。
「違うよ。あの子は制服着てた。今度のはなんか……白い服だった」
ピカが目を見開き、ますます強く京子に抱きつく。その頭に手を置いて、
「そう」と、京子は言った。「大きい子だったんだね」
秀夫がガラスの前で振り返る。彼が額をくっつけていたところが曇ってしまった。
「風子じゃないよ、母さん」
大真面目に優しく、宥（なだ）めるような口調だった。
「うん、そうだね」と、京子は微笑した。「風子なら、うちのなかにいるもんね」
しんとしてしまった。
京子はピカの髪をくしゃくしゃにして、大きく笑った。「イヤねぇ、ピカちゃん。そんな怖くないよ。きっと、誰か走って通った人がいたのよ」
「そうそう」と、テンコもあわてたように笑う。「俺怖がりだから、すぐビビっちゃうの」
早くお風呂に入らないと、もう寝る時間だよ。京子がピカを連れて奥へ戻って行く。テンコはウイ

ンドウを元通りに閉めた。秀夫はスリッパを脱いで景気よくパンパン叩くと、土間から上がりながら首をひねっている。
「やっぱり出るのかなぁ、このあたり」
「おじさん、声が大きい」
「いや、須藤さんからさ」
須藤というのは、ここの売買を担当してくれた不動産屋の社長である。代々この土地に根をおろして商売しており、自分で三代目だと言っていた。
「ここらは昔、空襲で焼けて、大勢死んだって聞いたからね」
その話なら英一も聞いた。この町は、関東大震災にやられ、太平洋戦争末期の大空襲にやられ、戦後の復興期には水害にやられ、とにかくやられっぱなしの過去があるらしい。
――私の親父の代には、古家を壊すと、土台の下から人骨が出てきたなんて、しょっちゅうありましたからね。
防空壕の跡が見つかって、一度に複数の人骨が出たこともあったそうだ。
――いや、今はさすがにないですよ。もうあらかた出尽くしました。この家は大丈夫です。
あらかたとか出尽くすとか、失礼な言い方じゃないのと思ったけれど、
「それだけじゃねぇよ。このあたりで死んだ人たちは、いちいち幽霊になんてならないって言ってたろ」
須藤社長の言葉の、肝心なところを、英一は思い出した。契約の大事な話はほとんど右から左に聞き流してしまったが、これだけは印象に残っていたのだ。
「幽霊にはならない。みんな歴史になったんだからって、そう言ってた」
へえ――と、テンコが口笛でも吹きそうな顔をした。「いいこと言う社長さんだね」

「ピカが怖がるんだから、こういう話はダメだ。だいたい大人げねぇよ」
すみませんと、テンコと秀夫が一緒に謝った。タイミングよく、テンコちゃ～んと、台所の方でピカが呼んでいる。
「いっしょにお風呂、入ろうよ」
行け！　と、英一はテンコに指令を飛ばした。「もしも今晩ピカがおねしょしたら、蒲団干しはテンコがやれよ」
「あ、それは大丈夫。ピカちゃん、俺と寝袋に入って、スタジオで寝るって言ってたから」
スタジオじゃねぇ、リビングだ！

3

テンコは日曜の晩も泊まり、やっぱりピカと一緒に寝た。おかげで英一も二人に付き合い、ふた晩続けてリビングに蒲団を運んで寝る羽目になったので、月曜日の朝は首が凝ってしょうがなかった。
不思議なものだ。テンコの家に泊めてもらうときは、英一も寝袋を借りて寝る。それだとゼンゼン平気なのに、蒲団だと寝違えてしまう。
「俺ん家の寝袋は、チョモランマとか登る登山家も使ってるヤツだからね」
店子家謹製の寝袋という意味ではない。テンコの家には家族の人数分プラス英一用の寝袋がキープされているのだ。なぜかと言えば、テンコの父ちゃんに、たまに庭で寝る趣味があるからである。
野宿だ、とテンコの父ちゃんは言う。シチュエーションとしてはそうかもしれないが、庭師が入って手入れしてるような庭のなかだから、本物の野宿ではない。しかもテンコの父ちゃんは、世帯主の権利だとか言って、最近は自分だけ芝生の上で寝る。春なんか、ふかふかだそうだ。

最初に聞いた時には、付き合いきれない変な趣味だと思ったものだが、やってみると予想外に楽しかった。無論、テンコの父ちゃんも季節を選んでこの趣味を実行するから、さほど身体に無理がかかるわけでもない。寝袋に入って夜空を仰ぐと、都心でもけっこう星が見える。悪くない。

「父ちゃんと、いつか新宿中央公園で寝てみようって言ってんだけど」

「やめとけ。ホームレス狩りにやられるぞ」

テンコの父ちゃんの患者さんが困るではないか。わたしの掛かり付けの先生、公園で寝ててボコられちゃって、わたしの入れ歯、作れなくなっちゃったんですよ。

週末から花菱家に居続けだったので、今朝のテンコはあの色彩豊かな出で立ちのままである。三雲高校は、一応制服があるけれど、基本的には自由服登校なので、差し支えはない。制服を着るのも、私服で来るのも自由、という意味だ。

並んで電車に乗り、改札を出て校門をくぐるが、テンコとはクラスが違うので、校舎に入ったところで別れる。眠たいし首は痛いし、しんどい月曜日だった。

まあ、授業が辛いのは今日に始まった話ではないから、いいけど。

こういうのを人生の皮肉というのだろうか。三雲高校に合格した時には、両親は大喜びしてくれたし、褒めちぎってくれた。偉い、よくやった、頑張ったね英一！　もちろん本人も嬉しくて、悪いことと言わないからやめといた方がいいよと言った担任や、挫折も人生経験のひとつと思って受けてみろと言った進路指導の先生たちを見返した気分だった。

今では、そういう思い出のすべてがくすんで、白っちゃけて見える。

何事も、瞬発力より持続力。そして持続力をつけるのは、瞬発力を鍛えるよりも、はるかに難しい。

テンコのおかげで――というか、テンコがいるせいでと言ってもいいかもしれないが、英一は三雲高校で、いわゆるひとつの青春満喫的な人間関係を築こうという欲望からは、最初から解放されている。登校して、授業時間を堪え忍び、放課後が来ると帰る。その間、クラスメイトに話しかけられれば適当に相づちぐらいは打つし、笑ったりもするけれど、特に親しい友人はいない。親しくなりたいと感じる誰かに遭遇してもいない。無論、ガールフレンドなんか別の銀河の彼方である。

ただ、同好会には入った。部活動ではなく、あくまでサークルだから、縛りは緩い。上下関係もあってないようなものだ。

ジョギング同好会という。名称からして気取りがない。英一はそこが気に入った。

活動への参加も自由だ。月曜から金曜まで、好きな時に出て、ウオーミングアップだけは一緒にやって、あとはてんでに学校の近くの決められたコースを走る。ちゃんと走破すると二十キロ近くあるコースだけれど、上級者になるとこれでは物足らず、フルマラソンに挑むために、別のプログラムを組んで他所に走りに行ったりする。

英一は、中学の時にはハンドボール部に入っていた。トレーニングのためにランニングはさんざんやったから、二十キロぐらいなら走れる。が、今のところはまだ、それ以上を目指す気にはなってない。

四月以来、月・水・金の週三日をジョギングの日と決めていた。でも今日はやめにしよう。走ると首に響いて痛い。下駄箱のところで、同好会でよく一緒に走る橋口保に会ったので、今日はパスと伝えた。

「俺も早めに切り上げるんだ。予備校の試験があるからさ」

橋口は物干し竿みたいな長身で、顔も手足も長い。中学の時に部活ではいちばん仲が良かったキーパーとよく似た体型で、話してみたら性格もちょっと似ていた。

「そういえば、花ちゃん、引っ越したんだって？」

言われて驚いた。橋口には言った覚えがない。年賀状だって、もしもちゃんと間に合うように書い

て出すにしても、これからである。
「そうだけど、なんで知ってンの？」
「テンコに聞いた」
テンコは、花ちゃんの友達は自動的に俺の友達になるという主義で、だから橋口ともすぐ親しくなった。英一以上に親しいかもしれない。
「あいつ、あっちこっちでしゃべってるよ。面白い家なんだって？」
橋口が笑う。テンコのヤツ、昨夜、寝袋の上から踏んでやればよかった。
「面白かねぇよ。うちの親、変わってるから。オレはいい迷惑」
ふうんと言って、橋口は笑うのをやめた。「写真館だったんだってな。立派なスタジオがあるって」
「ゼンゼン立派じゃないよ。町の写真屋だもん。すげえボロい家だし」
またふうんとうなずき、下駄箱から取り出したスニーカーをぶら下げたまま、
「俺ン家の親戚にも、写真屋やってた家があるんだ。親父の兄貴。俺の伯父さん」
今度は英一が「ふうん」と言う。
「三年くらい前になるかなぁ。店閉めて廃業しちゃった。商売にならないんだよ。みんなデジカメで撮って、自分でプリントするだろ？　店に現像に出すなんて、インスタントカメラぐらいだよ。それだって、コンビニやドラッグストアに持ってかれちゃって」
今度はふうんも言えなかった。写真屋の現状って、そうなのか。
「いろいろ便利になると、消える商売ってあるんだよな。専門職の方がヤバいんだ」
橋口はその伯父さんが嫌いではないのだろう。残念そうな口ぶりだった。
「おまえん家は、いいじゃん。絶対なくならない専門職だもん」
橋口の親父さんは弁護士である。で、橋口も司法試験を目指しているらしい。

医者一家のテンコもそうだが、三雲高校にはこういう生徒が多い。親が政治家だという生徒もいる。
それが英一の居心地の悪さの一因にもなっている。花菱秀夫は凡々たるサラリーマンだ。
勤めている会社は業界で大手と言われる精密機械の部品メーカーで、製造業の底力が見直されるようになった近ごろではテレビCMも（早朝か深夜の安い時間帯で）打つようになった。でも、秀夫はエンジニアではない。事務職で、入社以来総務一本槍だ。それも総会屋対策とかやっているならまだプロっぽいが、どうやら総務のなかでも庶務畑ひと筋の仕事であるらしい。
秀夫は、会社での出来事を、ほとんど家で話さない。別の話ばっかりしている。それでも、ごくたまに、歓送迎会や忘年会などの折、うちで飲み直そうよと同僚や部下を家に連れてくることがあり、そのときの会話を漏れ聞いて総合的に推察してみると、
――親父の会社での地位は、軽い。
という結論に達せざるを得ない。
だから英一も父親を軽んじている、ということではない。それほど短絡的に、社会と同じ物差しで自分の親を計ろうとは思わない。ただ時々、親父、仕事面白いのかな？　と疑問に思うことはあった。庶務って、要するに雑用係の何でも屋だろう。
今は正社員だが、この先はどうなるか不安でもある。業績が少しでも傾けば、真っ先にアウトソーシングされる部署ではないか。
まあ、未来のことを先回りして不安がってもしょうがないので、いいけど。
「うちだってわかんないよ。アメリカみたいに、弁護士が増え過ぎちゃって食えなくなるかもしンないし」
橋口も、ちっとも不安そうではない口ぶりで言って、じゃあなと体育館の方へと走っていった。細長いので、走ると身体が左右にゆらゆら揺れる。

テンコは中学の時にはブラスバンド部でドラムを叩いていて、こっちでは軽音楽同好会に入った。やっぱり緩くて楽なところらしく、いつ訊いてもどんな楽器や何のパートを担当しているのか判然としない。ただ毎日のように部室には通っている。だから、ジョギングしないで帰る日は、英一は一人だ。駅前のコンビニでちょこっとだけコミック誌の立ち読みをして、欠伸を噛み殺しながら帰宅した。

午後四時ちょっと前。この時刻では、家には誰もいない。ピカの通っている朋友学園は小学部から課外活動が盛んで、あいつは美術部にいる。例の花咲ゾウみたいなものを作ったり、絵を描いたりするのだ。そのほかに、本人がやりたがったので子供英会話教室にも通っている。そちらは週に三日だが、帰りは六時を過ぎる。朋友学園は京子の職場に近いので、タイミングが合うときは一緒に行き帰りしているけれど、均せば、ピカが一人で登下校することの方が、ずっと多い。

ピカが小学校から私立に入り、電車通学することになった時、英一は心の最深度部分から驚いた。よく両親が許せたというか、乗り越えられたものだと思ったのだ。いざ通学が始まってみたら、やっぱりダメだと近所の公立に転校させるのではないかとも思っていた。

風子を亡くして、両親はひどく臆病になった。臆病という言葉がキツ過ぎるなら、神経質になったと言おうか。ちょっとでもピカから目を離すことができない。風子の死因が死因だっただけに、風邪が流行る季節には、家のなかの空気が静電気を帯びているみたいにピリピリするのがわかる。

ずっとそんなふうだったのに、いざ就学となったら、六歳のピカを一人で電車に乗せて、学校まで通わせるという。まさか、という感じだった。ピカにはできる。あいつはしっかりしてるから。でも、あんたらの方が無理だよと思った。毎朝、母さんが玄関で、ピカのランドセルをつかんで泣くんじゃないの？

それがまあ、何とかなった。子供用の携帯電話と防犯ブザーを持ち、ピカは朋友学園に通い続けている。これまでのところ、緊急事態は発生していない。

学校は楽しいかと訊くと、間髪容れずに、

「うん！」と答える。

「花ちゃんは？　学校、楽しい？」

「まあな」

それよりお兄ちゃんと呼べ。

ジャージに着替え、湿布薬を探してうろうろしたが、見つからない。近くに薬局があったはずだ。買っちゃった方が早いと、勝手口でサンダルをつっかけた。

と、インタフォンが鳴った。

速攻で、英一はドアを開けた。

また、誰もいない。まだ陽があるのでセンサーライトは点かない。

ドアから出て左右を見回し、どなたですか？　と声をかけてみた。なるべく強い声を出そうと思ったのだが、力んだせいで裏返ってしまった。

バカらしい。このまま薬局へ行こうと思うのに、ドアを閉めてサンダルを脱ぎ、店の方へ回ってしまう自分がいる。念のためだ。一昨日のテンコと同じことをしてみよう。

あのウインドウに近づき、取っ手を引っ張って、扉を手前に引いた。

次の瞬間、腰を抜かしそうになった。制服姿の女子高生が、ガラスにぺったり貼りついていたからである。

いきなり英一が現れたので、向こうも驚いたらしい。パッと飛び下がって、スカートの裾を気にした。膝上二十センチぐらいのミニ丈だ。ごっつい膝小僧が丸見えだ。

足がある、と思った。我ながら情けないが、真っ先にそれを確認した。これは生身の人間だ。

ウインドウを閉めて、大急ぎで店舗の方の出入口のドアを開けてみた。

女子高生は、まだ歩道に立っていた。まともに目が合った。かける言葉が見つからない。
女子高生の方が、まばたきをして、先に口を開いた。「あの、ここって写真屋さんですよね」
英一の脳内言語ソフトはまだフリーズしている。
頭を振って、肩の上から髪を払い落とすと、女子高生はもう一度言った。「写真屋さんですよね？お店、また始めたんでしょ？」
英一はぽかんと口を開いた。とりあえず呼吸をする。
「ずっと閉まってたけど、このごろ、明かりが点いてるから……」
三雲の同級生の女子にも多いが、舌足らずな甘ったるい口調だ。それが英一に現実感を取り戻させた。こいつ、フツーの女子だ。
「一昨日、土曜日の夜も、来ました？」
やおら、そう尋ねた。こちらとしてはもっとも確認したい事項である。
「え？」女子高生はまた髪を振る。「一昨日って、あたしが？」
「だから、土曜日の夜、九時過ぎだったかな、インタフォン押したでしょ」
女子高生のきれいに整えた眉が歪んだ。目つきが険しくなる。半歩下がって、英一から距離をとった。
「ここ、お店じゃないの？」
気を悪くすると同時に、英一が自分と同年代だということを意識したのだろう。タメ口になった。声も尖る。「看板が出たまんまだから、写真屋さんだと思ったんだよ。悪い？」
「その時、何か白い服着てた？　白いコートとかセーターとか」
きれいな眉毛が吊り上がる。「そんなの、何か関係あンの？」
いやらしい、と口のなかで呟く。舌っ足らずの甘え口調がかき消えた。

英一もむっとした。「うち、写真屋じゃないから」
女子高生はさらにトンがる。「おかしいじゃない。だったらなんで看板出してるの」
「そんなの、何かあんたに関係あンの？」
女子高生がみるみるムクれた。これもまた同級生の女子たちで見慣れているが、しっかりと手をかけたメイク顔である。そのわりには可愛くない。たいていそうだ。なのにみんなメイクする。
「とにかく、うちは写真屋じゃないから」
言い捨てて、ドアを閉めようとした。思いついて言い足した。
「この看板も、そのうち外すから」
あと十センチでドアを閉め切るというところへ、女子高生のキンキンした声が飛んできた。そして、的確に英一の耳に突き刺さった。「こっちは、あんたンとこの写真で迷惑してンだからね。逃げようったって、そうはいかないわよ」
聞き捨てならない。
そう思ってしまった。
花菱家は写真屋ではないのだし、この女子高生が言う「あんたンとこ」というのは小暮写眞館のことなのだから、まったく関係ないのだ。ドアを閉めてしまえばいいのだ。
しかし、「迷惑」という単語は重い。
本当に、小暮写眞館で扱った写真に関するトラブルが持ち込まれているのであれば、放っておいたらまずいかもしれない。売り主のあの夫婦に――あるいは須藤社長でもいいが、ひとこと報せるくらいの義務はあるのじゃないか。
英一はドアを開けた。怒れる女子高生は詰め寄ってきた。
「迷惑って、どういう迷惑？」

声を抑えて、英一は訊いた。女子高生の方は、英一がブレーキをかけたと知るや、かえってアクセルを踏み込んできた。肩に掛けていた通学鞄を開けると、なかから一枚の封筒を取り出して、英一の鼻先に突きつける。

「自分で見てみなさいよ。これよ！」

英一は手を出さなかった。ハトロン紙の封筒が、鼻の頭にくっつきそうだ。

「どんな写真なんだよ？」

待ってましたとばかりに、女子高生はハイトーンの声で叫んだ。

「心霊写真よ！」

ありふれたキャビネ判のカラー写真である。画面の右下に、「4.20」の数字が並んでいる。この写真が撮影された日付だ。残念ながら年度まではわからないけれど、真新しいものではなさそうだ。

自分の家でくつろいでいる、家族の写真だ。ただ、来客も混じっているかもしれない。被写体に、同年代らしい人がかぶっている。

撮影場所は家のリビングだろう。畳敷きの座敷だから、〝茶の間〟という表現の方がぴったりくるか。お膳が据えられていて、六人の男女がそれを囲んで座っている。お膳の上にはビール瓶、コップ、料理の皿に寿司桶。ただの食事風景じゃない。だったらわざわざ写真を撮ることもないだろうし。あ、だから来客が同席していると考えれば、筋が通るか。何かの集まりなのだ。

あくまでも英一の受けた印象で判断するしかないからいい加減なものだが、この座の中心人物は、二人のおっさんだ。六十歳前後かな。たぶん兄弟だろう。顔立ちも、生え際の後退の加減もよく似ている。で、向かって右側のおっさんの隣に座っているのが、おそらく彼の妻だろう。やはり五十代半ばから六十歳ぐらいの女性である。

この三人は、撮影者の方を向いて笑っている。そして彼らの対面に、あと三人の人物がいる。彼らは当然、カメラに顔を向けるために、座ったまま身をよじるようにして振り返っている。

そのうちの二人は、またおばさんである。一人は正面にいるおばさんとおっつかっつの年代。もう一人は、三人の〝おばさん〟のなかではいちばん若いようだ。ひょっとすると四十歳にもなってないかもしれない。

三人の女性たちは、見た目の感じでは、どの組み合わせでも姉妹関係ではなさそうだった。顔立ちも体格もまったく似ていない。

そして不思議なことに、手前の二人のおばさんは、揃って長袖の黒いワンピースを着込み、首には真珠のネックレスをつけている。

まだ世間知の少ない英一にも、一見してこれが喪装だということぐらいはわかる。となると、この膳は法事の後の精進落としなのだろうか。でも、他の人たちは平服だ。

いや、ちょっと待て。平服だけど、まるっきりの普段着でもない。みんな襟のついたものを着ているし、男性陣はベルトを締めスラックスをはいている。正面のおばさんの、膳の脚の陰にちらっと見える足は、ストッキングに包まれている。それにこのおばさんも、よく見ると襟首のところにネックレスが覗いているようだ。

英一は立ち上がると、隣のピカの部屋へずかずか入っていって、虫眼鏡を探した。このあいだ理科の実験に使うとかで買ったばかりのはずだ。

怒れる女子高生は消え、件の写真だけがこうして英一の手のなかにある。英一は自室に引っ込んでいる。まだ誰か帰ってくる時刻ではないが、自分の机に座っている方が集中できるし、この写真を不用意に家族に見せてはいけない、という判断もあった。

確かに、不気味な写真だったから。

笑ってごまかしてしまえないほど、奇っ怪だったから。
女子高生から写真を受け取り、一瞥した瞬間にそう思ったから、英一は大真面目に取り組んでいるのである。そう、写真の分析に。
ピカの虫眼鏡は学習机の引き出しに入っていた。英一はそれを手に持ったまま、階段を降り玄関まで出て行って、門灯を点けた。台所の明かりも点けた。師走の陽は短く、写真の検分に夢中になっているうちに、家の外も内もいつの間にか真っ暗になっていた。それが急に薄気味悪くなってきたのである。廊下の電灯まで点けてしまった。
アホかオレは。
背中がぞくりとする。
虫眼鏡を使って拡大すると、正面のおばさんはやっぱりネックレスをつけていた。柄物のブラウスの襟にはレースの縁取りがある。
膳を囲んでいる六人目の人物――膳の手前の振り返り組三人の最後の一人は、二十代半ばから三十歳くらいの男性である。彼の素性は一発で推定できた。たぶん、正面のおばさんの（つまりは推定される正面のおっさんおばさん夫婦の）倅だ。おばさんと、耳の形がそっくりなのである。先っぽが尖っていて細長く、耳たぶの小さな耳。
血族の特徴は、耳の形によく現れる。顔には他人のそら似があるけれど、耳にはない。耳が似てれば、高確率で血縁関係が存在する。この豆知識をくれたのはテンコの親父さんだ。ついでに言うなら歯並びも似るそうだけど、これをくっきり見分けるのは歯科医じゃないと無理なので、素人は耳を見ろ、と言った。その時には、こんなこと教わっても一生使い道がないと思ったものだけど、聞いておいてよかった。
英一は買い置きのノートを取り出すと、ページを横にして、写真に写っている人物の配置をざっと

描き取った。そしてその頭の上に、推定される関係を描き込んでみる。正面のおっさん二人のうち、おばさんと並んでいる方に「男①」、並んでいない方に「男②」。そして二人を半円で結んで、そこに「兄弟（？）」と書く。
「男①」の隣のおばさんには「女①」。隣のおっさんと半円で結んで「夫婦（？）」。手前の喪服二人のおばさんには、年齢順に「女②」「女③」と書いて、半円で結んで「来客？」。そして六人目の「男③」が「夫婦の倅（？）」。
さて。
この写真の被写体は七人だ。
しかし七人目は、他の被写体との関係を推測する以前に、「人」と数えていいのかどうかという問題が――まずあった。
賑やかに会食する六人のいる茶の間の右手に、座敷の切れ目の敷居が見える。唐紙が開けてあるのも見える。敷居の向こうは板敷きで、廊下ではなく台所なのだろう。テーブルの端っこと、スツールが半分写っている。
要するに、誰が撮ったのか知らないが、ヘボな写真なのである。座敷の男女六人の記念写真なら、座敷だけを撮るべきだ。なのに、フレームの右側に余分な景色が入ってしまっている。もっと中央の被写体に寄って、まわりの雑多な家具などが写らないようにするべきだった。
台所のスツールは、当然テーブルの高さより低い。だからそこには空間があく。七番目の被写体は、そこにいた。
顔は女だ。もとい、女の顔だ。
額から上は、テーブルの天板で切れている。天板の上に、この女の髪（頭）の部分が飛び出して写ってはいない。

そして顎の先は、スツールのシート部分で切れている。スツールはありふれた木製の三本脚のもので、そこにも空間があるから、七番目の被写体がこんなところにしゃがみ込んでいるのだとしたら、スツールの脚のあいだに被写体の身体が写っているはずだ。あるいは、スツールからはみ出して写るはずだ。

なのに、何も無い。

つまり、テーブルの天板の下とスツールの座部とのあいだに、女の眉、両目、鼻、両の頬、唇だけが、ぽかんと浮かんでいるのである。その目はぱっちり開いていて、カメラを見ている。唇は軽く開き、何か言いかけているようにも見えないではない。顔の両脇がぼんやりボケているので、耳は見えず髪型もわからない。

なるほど、あの女子高生が「心霊写真よ！」と叫ぶわけだ。テレビのバラエティ番組で心霊写真や心霊ビデオを取り上げる時には、これなんかよりもっとピンボケの、そう言われて見れば人の顔に見えなくもない、というレベルのものにだって、出演者たちがきゃあきゃあ騒いでいる。

英一は写真を凝視する。写真の女の顔も、英一を見つめ返してくる。

あんた、誰？

無理矢理もぎ離さないと、目がそらせなくなる。だから英一はそうした。

あの女子高生は、この秋、十月の第一週だったか二週目だったかの日曜日、近所の戸田八幡宮という神社の境内で開催されていたフリーマーケットで、この写真を手に入れてしまったのだと言った。

——欲しくて買ったんじゃないわよ。

彼女が買ったのは、三冊セットで金百円也のルーズリーフのセットだった。表紙が可愛かったのだそうだ。で、家に帰ってからよく見てみると、そのうちの一冊に、この写真が挟まっていたというのだ。

——剥き出しで入ってたのか？

——違うわよ。よく見なさいよ。その紙に挟んであったの。

「その紙」とは、小暮写眞館のネーム入りの横長サイズの封筒だ。さほど傷んではいないが、折れ目のところが擦り切れている。

——この写真、一枚だけ？

——そうよ。ほかにも何かあったら、まとめて一緒に持ってくるに決まってるじゃん。気味悪いもん。

彼女にとって、写真の出所を推測する手がかりは、〈小暮写眞館〉という名入りの封筒だけである。

——友達に訊いたら、この商店街にそういう写真屋があるって。だけどもうずっと前から閉まってるよって。

困った彼女は、何度もこの店の様子を見に来ていたのだそうだ。看板が残ってるから、また開業するんじゃないか。閉店ではなく、休業しているだけなんだろう、と。

そこへ何も知らない花菱家が引っ越してきて、ご丁寧にもリフォームした上で、世帯主の酔狂で看板を掲げたまま生活を始めた。女子高生にとっては「待ってました！」である。

——黙って新聞受けに突っ込んどいたってよかったんだからね。けど、それじゃ返したことになンなくて、やっぱあたしが祟られるかもしンないし。

とにかくあんたのとこの写真なんだから、あんたが始末してよね。一方的にまくしたてられ、手にした写真に目を奪われているうちに、気がつくと彼女は消えていた。名前も連絡先もわからない。うちは小暮写眞館じゃない、善意の第三者に過ぎないのだと、もういっぺん主張する機会を逸してしまった。

しょうがないからこうして問題の写真と睨めっこしている。何か手がかりはないのか。

ていうか、さ。英一は渋々認める。
手がかりって――何をするための？